

三河アララギ

平成二十五年

二月号

第六十卷 第二号



ニューヨーク日記(76) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

December 2, 2012 : Wrapping time

Blue Shoe Diaries



サンクスギビングが終わるとクリスマスモードに突入。クリスマスプレゼントを買って、包んで、クリスマスまでに送る／渡す。それで年末だから色々なパーティーやディナーで結構忙しくて皆結構ストレス溜まる時期。私は殆どネットでショッピング。そのままネットからプレゼント送っても良いんだけどこっちの雑なプレゼントの包み方が気に入らない。だから家で包み直してそれから送る。今回おもちゃを NYT-シャツで包んだらかわいいく出来た!

The end of thanksgiving means the beginning of Christmas season. Christmas present shopping, gift wrapping, gift mailing. And since it's the end of the year, there are lots of parties and dinners to go to. So it's a bit hectic and ultimately stressful because you have to get everything done and delivered by X'mas. I do most of my shopping online so I can send the gifts directly from there but I just don't like the blah gift-wrapping. So I do it myself, then mail it out. This year, my favorite was this toy (a Furby!) wrapped in an 'I ♥NY' tee. Cute, no?

目次

第六十卷第二号(通卷七一〇号)

表紙 雪	今泉 由利 (1)
ニューヨーク日記(76)	Blue Shoe (2)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	杉浦 弘 (4)
歌集「本の本」	岡本八千代 (5)
青桐の黄葉葉	今泉 由利 (6)
四分儀座	弓谷 久子 (7)
文明忌	青木 玉枝 (8)
至福の	佐藤 喜仙 (9)
大雪山	内藤 志げ (10)
庚申ばら	林 伊佐子 (11)
日々雑歌	安藤 和代 (12)
ハミング	伊藤 忠男 (13)
冬の旅	胃甲 節子 (14)
感謝	半田うめ子 (15)
さぎ草	近藤 映子 (16)
我家の灯	清澤 範子 (17)
豊作	杉浦恵美子 (18)
ふたりして	堀川 勝子 (19)
フルマラソン	平松 裕子 (20)
熊笹	小野可南子 (21)
黄金の光り	山口千恵子 (22)
黒大豆	夏目 勝弘 (23)
日光	阿部 淑子 (24)
人の世に	富岡 和子 (25)
葉つき柚子	白井 信昭 (26)
創刊	東洋大学 (26)
現代学生百人一首	

「ことよせ」	私の一首
「歴代天皇御製歌」(五)	
貫名海屋資料館	
「六」	
子規の短歌革新とアララギの歌人(7)	
贈呈誌	
ある自然科学者の手記(9)	
絹の話(27)	
物理学者と詩歌の世界(37)	
短歌に詠まれた茂吉	
楽しい時間(3)	
日光紀行	
「氷魚」のことから(145)	
ことのはスケッチ(410)	
和菓子街道(76)	
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	

俳句	いーはとぶ (27)
	内藤 志げ (28)
	夏目 勝弘 (28)
	林 伊佐子 (29)
	半田うめ子 (29)
	平松 裕子 (30)
	堀川 勝子 (30)
	山口千恵子 (31)
	弓谷 久子 (31)
	植村 公女 (32)
	一石 (32)
	喜仙 (33)
	皓一 (33)
	佐藤 喜仙 (36)
	大橋 望彦 (38)
	今泉 雅勝 (40)
	一石 (42)
	鮫島 満 (44)
	山本紀久雄 (46)
	夏目 勝弘 (48)
	岡本八千代 (49)
	今泉 由利 (50)
	平松 温子 (52)

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

竹の秀は風に鳴れども寒からず寒の日のわが竹林の中

P
11

ゆらゆらにもとさへ揺ぎなびき立つ大寒の日のうらら篁

P
19

歌集 「一本の木」

杉浦 弘

月のなき勸月会にわがうたふも一度母^{かあ}さんに逢いたいな

余りもの捨てに行きたる草むらの盗人萩の実をつけ帰る

燦々と日のかがやける秋空の雲なき下にひとり脚組む

青桐の黄葉もみぢ

蒲郡 岡本八千代

境内を歩みゆくわれの足もとにかさこそ触るる青桐の落ち葉

君逝きてはや一年ひととせのすぎゆきぬ冬の徳源寺の甍は鈍色にび

親族の如く吾をも招きたまふああ兼松家縁りの臨濟宗徳源寺へ

アラジンの青き炎を傍らに夜更け読みをり子規の「月見草」を

鎌倉よりの君の「邑落ゆうらく」にて一服よ夜更けてひとり愉しからずや

ひとりなばひとりの想ひ次々と浮かびつつまた忘れゆきつつ

「芸術に益も正月もなきぞよ」と言ひてたまひし二人の先生

夫は夫にわれはわれなりに過ぎゆかむ事一つつつ心一步つつ

けふもまた残りの穂すすきしろじろと入り日の茜あかねのうすあかりの中

冬至すぎてけふの入り日の茜色庭の穂芒にうすひかりして

四分儀座

東京 今泉 由利

瓶に挿す幸福の木の葉の増ゆるいよよ真白き根っこもいづる

地平まで続くカンポの真ん中に両手に受けむ流るる星を

栗餅の搗きあがる刻目指しゆく今朝の散歩は重く帰りぬ

何もない訳ではない真空はダークマターの満ち満ちるとこ

スパイスの織り成す味のしみじみと甦りくるインドのことの

直ぐ伸ぶる若松大枝抱きゐる私の家へ帰りゆくとき

宇宙間の地球の位置を確かめて初日の光り私に来よ

初日の出昇れるまでのいますこししぶんぎ座流星群の方を見てゐる

月を背に北の空に目を凝らし「壁面四分儀座」放射点辺り

頑なひとり心に生きこしが襻をつなぐ心のあるを

文明忌

豊川 弓 谷 久 子

花ひとつ咲かず萎えたり今年のダチュラ剪りつめやらむ今日文明忌
雀等は今朝は何処ぞパン屑の台にも深々雪積りをり

雪庭に赤くひらひらゆるるもの散り残りたる紅葉と知りぬ

バースデイケーキと笑顔の写メ届くみさと十七歳に今日なりたりと
百三歳存命と聞けばなつかしき若き日通ひし貸本屋さん

中風に臥せるし夫の二十年憶ひつつ煮る冬至の南瓜

今宵はイブとみさと自慢のクッキーのまず星形をひとつつまみぬ

クリスマス寒波の夜をささやかに子と分け合ひぬ小さきケーキ

心静けき年の瀬となる中天に今年最後の満月明し

己が齡忘れゐる日も思ひ知る日もこもごもに今年も暮るる

至福の

新城 青木玉枝

こんなにも長生きするのが不思議なり卒寿と言ふ字かみしめて居り

皺しわの手に夫の故里伊勢の海の真珠の指輪なつかしみ見る

午前午后火燵こたつに入りて編むマフラー隣家の人々にさし上げる

真実の孤独を味はふ山里に独りの楽しみ又よきかなと

必要に迫られ針に糸通す無理も承知の勘を頼りて

もみじ葉の枯葉一枚舞ひ舞ひて網戸に今朝の私の発見

初めての大雪庭に五十センチ窓明けて見る驚きの朝

山里の雪は積りて雪景色足跡なき道何処まで続く

呆け防止一道一都二府かぞへ四十三県の名かぞへゆく

あたたかき電気毛布に包まれて至福の夢なり目ざめて暫し

大雪山

東京 佐藤喜仙

北の港海より霧の立ち昇り夜明けの外燈籠の中に

海霧深き港の路地の奥深くさまよひ歩く船員の影

カルデラ湖の湖岸に立ちて見渡せど霧の摩周湖姿なきまま

広大な屈斜路湖畔静かなり多数の出湯の並べる夕べ

阿寒湖の秋祭の夜更けにけり湖底のマリモ眠りをるらむ

初秋の雄阿寒岳に登りたるパンケペンケの両湖光れる

流水の俯今はどこへやら知床の海深々澄める

眼下には番屋が数棟ひそとあり浜に寄せては碎くる白波

秋の声聞かば各地の川登る鮭は競ひて産卵近き

大雪に秋は早かりナナカマド深紅となりて山肌染むる

庚申ばら

豊川 内藤 志げ

迎春と桜の花と巳の絵馬と短冊美はし茂と活版

短冊は二千一年巳の年に茂様も巳年と知りぬ

新発売の赤き長靴作業用軽きがうれし落葉さくさく

木枯しに楠の落葉積る道さくさくの音畑へ近道

坂の道ヤブラン一株木漏れ陽に黒き一粒艶めき見ゆる

側道の轍の湖なみに初氷り鋭き線の模様を作り

トラックを止める間もなしばりばりと氷の模様を壊してしまふ

庭隅の庚申ばらは一重咲われより先に今の家にある

庭隅の庚申ばらを切り詰めて今年終りの花を残して

里芋を掘りし跡より土蛙数多の動き冬眠支度か

日々雑歌

岡崎 林 伊 佐 子

老いのみが残されて棲むふる里の未来のことが気になり始む
頭上の柚子の実あまた冬の陽に黄に輝くふる里の庭

池の面に浮きてはなやぐもみじ葉に見え隠れする真鯉と緋鯉
水底に身を寄せあいて冬を越す真鯉緋鯉も三十歳をこす

間伐に捨てゆく杉の倒木の年輪ほそく幾重にもまく

若き日に植えたる杉の間伐も採算とれず倒木となる

倒木となりて苔衣たいりをまとう杉育てし苦労も今はなつかし

朝あさのきびしき霜を囲いして青潔し葱の畑は

妻としてまた祖母としてなすことの大きくありぬ三世帯同居
わが師より形見の書籍たまわりて遺志を継ぎゆく生涯教育

ハミング

豊川 安藤 和代

梨畑に忘れられたる鳥おどし風にカタカタ夜の部屋に聞く

梅雨には実この北風に負けずして地味に集まり枇杷の花咲く

明日集ふ孫子待ちつつキッチンにハミングしをり食器を選ぶ

嫁逝きて三年なる甦る子等呼ぶ声の明るき響き

義父母ちちははの墓静もれり冬木立香の煙の真直に立つ

美しく老いたし等とは思わねど今朝の鏡に淡き紅ひく

小さき靴二足並べて干されあり寒さ忘るる買い物の道

またひとつ齡重ねる月となる師走の風に山茶花の咲き

新しき手帳求めに街に出る表紙はピンク花柄もよし

幼き日ウルトラマンになると言いし子は教員となりて二十年

冬の旅

大阪 伊藤忠男

かんじきに足を取られて横倒し歩き慣れない北国の旅

温泉に身を委ねては窓越しに聞くや風音縦笛の音に

慰めもうつろに響く冬嵐凍てつく身体縮めて歩く

幸せは我慢苦勞のその先と雪掻きダンプ屋根で操る

路面にはまばらな小雪薄化粧手に息かけて歩くビル街

南国に迷い込みしか高知県類に野の風花の香りが

ミサイルに揺れる年の瀬この年の怒りも兼ねる「金」の一文字

階段を上る人あり降りる人もいずこに向かうかこの年の瀬に

マニフェスト空虚に響く今なれど約束なしも空々しきや

ファッションカタヌキにキツネうさぎあり白黒ピンク帽子の飾り

感謝

豊橋 胃 甲 節 子

気忙はしく今日の青空確かめてふとんを干しカバーの洗濯

戴き物の御礼に伺ふお隣より又戴きて帰り来たれり

良き隣人に恵まるる此の倅せを感謝せぬ日は一日とてなし

柗の花の豊かに咲き満てり子供の頃より其の香に魅かれて

朝の庭掃きて集むる木の葉より深紅の桜葉最後の桜葉

見も知らぬ人であるふと道をゆく人には笑顔で挨拶をする

ひもすがら歌を詠まむと座しをれど歌は詠み得ずいたく疲れぬ

歌詠めぬ吾が身ひとつを持って余しホトトギスを見むと立ちゆく

枇杷の花見頃とテレビに見てをれば未だ忘れ得ず花の薫りを

新らしき事難かしき事学ばずに空しく今日もはや暮れにけむ

たぎ草

新城 半田うめ子

さぎ草の真白き花のさわやかに咲きてゐたりき緑なす庭

広きなる御津屋敷にてさぎ草の咲きてゐたりき思い出すなり

竹林御津先生の庭の中種々の鳥を眺めし日思ふ

楽しみて西川辺を歩く眺めさわやかなりし白鷺の舞ふ

夕暮れて中空に見ゆる細き月利鎌の如き輝やきて居り

今日も又もち来^きたるなり孫香奈の手作りなり飯の味がよく

孫の詩乃文化会館にてピアノひく静かなる音にて心足らへり

野あざみを探しつつ川辺を歩き行く薬になると煎じて飲む

野田川に鯉そよぎをり数ひきの楽しみ眺む橋の上より

我家の灯

名古屋 近藤映子

この年も真紅に咲きぬシクラメン我家の居間の灯の一鉢

窓側に紅々咲きしシクラメン我八階の居間の灯

「レフレール」ピアノ連弾兄弟のアンコール拍手に思はず加わる

レフレール兄弟各々のソロ演奏に吾ひかれ前のめりに成りて

ガラス越し朝日を受けしシクラメン花々の陰陽紅くはえたり

我夫を見舞ふ度ごと声掛けぬ師走の外の寒さ伝えぬ

わが夫の落ち付きてをりこのままに新年迎へたし

この冬の最低気温とテレビのニュース一人八階に居るたそがれ

一年の疲れ一度に押し寄せたごとくに娘の熱のすぐに下らず

三日目に娘の熱は薬にて下ればホット吾はいねむりとなり

豊作

春日井 清澤 範子

苦しみも福に変ずる望して辛きも幸せと思ひつつ暮るる
杖つきて歩む吾には抵抗あり玄関の段差をゆつくり歩く
娘の運転にてスーパーへ来ぬ吾の手引きつつ店内まわる
雨の日の夜中静かに過ぎてをり夫の寢息と時計の音と
庭にある蜜柑色濃く実りたり大安なる今日取ると決めたり
どうだんと並び植ゑある蜜柑の木枝しなわせて今年豊作
年に一度のピアノの調律今日終へぬ夫は演歌を弾き始めたり
栃の葉を掃き寄せられたる境内を歩めば小鳥天高く鳴く
十二月半ばを過ぎて冷え込みぬ美容院のカットは衿足長く
八王子神社の午後は陽だまりとてなりて猫が居眠りてゐる

ふたりして

蒲郡 杉浦恵美子

殊の外寒きところに行きたかり夫の遺品のふはふは防寒着

生来の真面目さ哀し我が夫は闘病中にも学びて居たり

夫のこと哀れがりても結局は我が身に空しく訝するのみ

其処からは太平洋まで見えるかい豆粒ほどの一羽の鳶よ

元気ですかありきたりなる添書が却りて哀し夫宛の賀状

多色刷りの版画の賀状制作は我等夫婦の行事にてありき

我が描き夫彫り共に刷りたりし我が家の賀状二度とはできぬ

我が夫は彫ること早し炬燵にて眼鏡外して彫り続けたり

ふたりして夜なべ仕事に賀状刷り部屋一杯に並べて品評

三十年繰り返したる賀状刷りああ出し抜けに断ち切らるとは

フルマラソン

豊川 堀川 勝子

マンネリをちよつと打破せむ目立たむと孫の写真を賀状としたり

里芋の子いも孫いも見定めて稲藁豆藁深ぶか囲ふ

富士山の山裾めぐるフルマラソン挑むと吾子の弾める声に

晩秋の富士山麓のフルマラソン忿怒のありや四十二歳

晩秋の富士の山麓寒からむ何に忿怒の四十二歳は

よろけつつ走り終へしや厄年の吾子のタイムは六時間とふ

母の米寿祝の膳に手造りの「干し芋・干し柿」一品添へむ

目の奥に鈍き痛みの残り居て顔の浮腫は我が顔でなし

不安定な血圧で知る我が老化読むこと書くことドクターストップ

うす味の食事に慣れて体力の自信返りぬ正月ま近し

熊 笹

豊川 平松 裕子

雨の雫正しく落つるその音を苛立たしきと思ふ心根

苛立てる心に窓を開けてみる雫は何に当たりて音たつるや

今年また師の手づからの注連縄を玄関高くかかげて新年

熊笹を可南子さんより戴きぬこんなにも容易たやすく手に入るうれしさ

ホトトギスの枯れ立つ庭の一隅を日暮れる前に刈らむと思ふ

石臼を据へたる台の木の朽ちて臼傾きしまま年の瀬となる

怒おこれても怒いかり鎮めることのできる我となりたりいつ頃からか

力任せに怒りてもあとの争ひに力を注ぐ気力失せをり

年の瀬を朝より雨の降り止まず明日煮る予定の角煮煮てをり

紅白のなますの甘酢は少し甘め何もせぬよと言ひつつ作る

黄金の光り

豊川 小野可南子

一条の黄金の光り射すところそこより私の今日が始まる

縁側に冬を囲へる鉢草に先ず一番の朝のひかりを

ばーばの髪と僕の髪形似ているね美容院より帰り来たれば

僕の子供はばーばの曾孫になる訳だ顔しげしげと見上げて言ひぬ

枝先の五六枚なる紅はハウチワ楓の極りの色

木守り柿のひとつをしきりに啄める小さき影見ゆ逆光の中

師の君に景德鎮写しと褒められし我がコーヒーカップの藍の色美し

足元にまだぬくぬくとユタンポよ目覚めゆたけく朝となりたり

ひよどりの嘴なる跡のそこに緑のキャベツ抱へて帰る

青々と列なすキャベツの間より飛びたちゆけり鶉の群

黒大豆

豊川 山口千恵子

ひらひらと花びら揺るる皇帝ダリアただひたすらに天空に咲く

秋の日に高々咲きし皇帝ダリア一夜に萎えたり花も蕾も

くろぐろと皇帝ダリアは霜枯れぬ未だ咲かざる蕾もともに

干きたる莢を棒にて叩きゐる師走の日射背に受けながら

掘げ干す今年穫れたる黒大豆冬の日射しに丸き粒々

風邪ひきし孫はわが家にただ眠る窓辺の楓の紅葉あかあか

ほのかなる恋の短歌うたなり共に読むひな子はもうすぐ十四歳

戯れに孫の塗りくれしマニキュアに少しはなやぐわれの心の

マニキュアの指先かざし楽しかり風邪癒えきたる孫とゐる

投票は平和を守る人になると大学三年はたちのこの子

日光

豊川 夏 日勝弘

左千夫と節雨でも行くと約しし滝見我も明日はと宇都宮に向ふ

午前五時起き出で日光行きの中中にて昨夜作りしにぎり飯一つ

冷えしるき日光の駅前の広場に立つ白じろ筋なす雪の男体山

皓皓コウコウと二尾に割りし竜頭の岩ヒゲなし三本の冬木白じろ

白根山に今降る雪を運ぶ風中禪寺湖は逆さ白波

十三番の岬に音する今日の風雪とシブキの水際を通る

轟ける大滝に並び岸壁より白糸なせる四筋の白滝

左千夫らが五百岩群を踏み下りしこの大滝にエレベーターがある

デジカメの電池の切れし所より大滝に向ふ人人分け帰る

思ひ立ち行動せし日が日曜日帰りのバスの渋滞のなか

人の世に

横浜 阿部 淑子

天皇の誕生日にも国旗無しと議員の演説恥入りて聞く
年の瀬をあせるに反し渋滞の進まぬ時ぞ一首推敲
お歳暮に贈られし品一様に事情知りたる即席食品
人の世にウイルス細菌はびこりぬ如何に守らむ老いの身体
氷上を滑りて来しか耳の端を固めつ痛めつ寒風の吹く

葉付き柚子

東京 富岡 和子

恒例の歳末募金の当番は戸別訪問話が弾み
外苑のいちよう黄葉見たく来ぬいちよう散る散る兎らは燥げる^{はしや}
無造作に玄関先に置きてある葉付き柚子は義兄^{あに}のもたらし
小春の陽^ひ百日草の種子を採るれんげ草の種子は蒔きたり
温暖化の故か師走のつめたさに部屋で厚着し手袋もして

創刊

豊川 白井 信昭

カーポートに大きな蜂の巣のひとつ幾多の蜂は動くことなく

新年の本堂に入り賽を投ず広間に軽く音の響きぬ

海よりの冷たき風の吹きくるを潮の香りをまといて帰る

振り向けば「三河アララギ」の創刊はわが幼かりし昭和二十八年

現代学生百人一首

東洋大学

アラムも母にもたよらず起きられた日はいつもより饒舌になる

飯田女子高等学校二年

宮島沙耶香

駆け寄られ「せんせい、あのね」と言われたらさらに高まる保育士の夢

光ヶ丘女子高等学校三年

曾山真帆

海外の父とメールで会話する会って話すより素直になれて

山口県立徳山高等学校一年

平田恵利

機械科で男子の中に女子一人それを覚悟で目指す夢あり

山口県立徳山商工高等学校一年

水津利亜奈

『いじつよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

長々と尾の先までも抜けてゐる頭の見えぬままの蛇殻

牧原正枝

時雨すぎて真赤き紅葉の三河湖を歩みつつ夫は「空気がちがふ」と

岩瀬信子

墨すりて香りかすかに漂へりわだかまり少し消えゆくごとく

石田文子

あさやけの空色映すおこし池あおさぎ一羽ぼつねんとたつ

山崎俊子

新年の三ヶ根山の頂より見わたす三河の青波静か

牧原規恵

ひとたび
一度もさしたることなき蛇の目傘このままそつと傘寿の日までは

三田美奈子

福井より新米十キロ届きたり今朝は炊きをり甘き香漂ふ

稲吉友江

海の辺の坂道下れば見えてくるナンキンハゼの今年の紅葉

鈴木美耶子

小泉八雲遺愛の足高文机の前に座れり孫とわれらは

吉見幸子

私の一首

道沿ひに高く低くと穂の並ぶえのころ草も美しきかな

内藤 志げ

近頃は舗装されない道は少ない。私の藪に沿う畑は土の道、轍の片方にエノコロ草の穂が並ぶ、常に通るも気付かない、大小それぞれ可愛い穂草、野の花が私は好き、畑仕事を休み道端を眺めるとたいいてい何かは小花が咲いている。見れば見る程美しい。

結句の美しきかな、外に美しいを使わず表現方法を考えたい、私にはまだ勉強不足。

我が前をオンブバッタが逃げてゆくただそれのみの朝の野の道

夏目 勝弘

朝々歩む道、両脇より草が道をより狭めている。草に触れたときオンブバッタが前に飛び出してきた。

近づくともた一メートル余り前の道の真中に、また近づくと同じことを繰り返しつつしばらくゆつくりと歩みを楽しんでいる。

そんな他愛ないことに新鮮な思いがし、これが今生きていることなんだと素直に思えた。
そんな瞬間の思いが自分の短歌である。

日に蒸れて匂ひ残れる雑草の上に咲きたる昼顔の花

林 伊 佐 子

昼顔の花は原野にひろく自生する多年草の花です。路傍の雑草からんで咲きのほり日盛りもちぢむことなく長く咲く昼顔の花に心をひかれました。毎日散歩しながら花のあるうちは数えるのが楽しみでした。山育ちの私は、素朴な花に心をひかれます。季節が変つても、根強く咲いた昼顔の花を思いだしながら、健脚をしております。推敲しても平凡な歌で深く反省しております。

青蛙窓辺にとまり朝つゆのありてよきかと眺むしばらく

半 田 う め 子

窓の下草の多くて殿様蛙も居て楽しいです。だが小さい青蛙は窓辺にとまって居ります。つゆにぬれての小動物を見られる幸福老人となつても楽しい生活です。

父の遺品一つ減らして寂しさと虚しさ残り客を見送る

平松裕子

父の生前に「これいいね」と言っでは自分のものにして来た何点かの骨董品、又、父の死後兄から私のところに来た何点かのそれら。父の遺品として私なりに大切にしてきたつもりだった。しかし請われればいやと言えない私はずいつい手放してしまふ。そんなとき、いつも「あゝ、また手放してしまった。」と言う虚脱感を覚えます。それは父との関わりが希薄になっていくような寂しさでもあります。

倒れ臥す百日草を選び分けて明日に咲くべきひと枝剪らむ

堀川勝子

この一首は今年の九月三十日から十月一日にかけて、この地方に襲来した十七号台風の時のものです。百日草の花が昨日までは枝高く幾色もの花ばなが所狭しと咲き誇っていましたのに台風の一晩の末今朝は見るも哀れに倒れ臥し折り重なっていました。泥に塗れて居る中に蕾の枝も数本ありましたので、短かく切ってくりやのコップに挿しました。

たんねんに縫ひたる針目ほどきゆく姑ははの手なる子守半天

山口千恵子

孫のために、姑が丹念に縫ってくれた子守半天。今はもう赤ちゃんを負んぶしている人の姿も見られない。廃品となつてしまつたが、きれいな模様の布地は、何かに役立てようと思つてみた。縫目を解きながら、幼かつた子供のこと、若かつた自分のこと、姑のことなどいろいろな思いが浮んでくる。

孫を思いつつ仕立てたであろう姑の気持ちに有難い。四十余年も昔のことが、よみがえり感傷に浸りつつ……。

人住まぬ隣家の庭にたかだかと木立ダリヤは蕾を持ってり

弓谷久子

初冬の青空に高く伸び立つて凜と咲く、この花が私は大好きです。皇帝ダリヤの名ももつてピンクの花が大輪で空の青さに何とよく似合っていることか、春に力強く芽吹き夏の暑さも秋の嵐にも耐えて、晩秋から初冬にかけてたくさんの蕾が次々と大輪の花となり霜が来れば素枯れて行く。又来年もこの人住まぬ庭に咲いて私を楽しませて呉れるでしょう。私はこの花が大好きです。

『俳句』

冬日ざしモデルルームの白ワイン

植村公女

着ぶくれて町内会の回覧板

小春日の坂道長し姉見舞う

こんなにも春を寿ぐ国であり

一石

時の壁超えれば心新たなり

冬の月空が卵を産んでいる

馬鈴薯の畑尽くる先羊蹄山

喜仙

残菊や語りつがるる城の址

石路咲くや料亭の門の清め塩

荒庭や枯れ草の先尖りをり

皓一

銀杏散るジャージ姿の竹箒

身の上をしかと聞かされ石路の花

「歴代天皇御製歌」(五)

貫名海屋資料館

『允恭天皇』第十九代 在位 四二二年―四五三年

允恭天皇は、第十六代、仁徳天皇の第四皇子。

都は遠飛鳥宮、現在の奈良県高市郡明日香村。飛鳥の地に宮を設けた最初の天皇。

新羅から医者を招き、父天皇の病を治療する。

諸氏族の氏の乱れを正すため、甘檜丘において盟神探湯（くがたち）、神明裁判により、是非、正邪を判断した。氏姓の混乱を正し、多くの職業の長の氏姓を定められた。

陵墓・大阪府藤井寺市、恵我長野北陵

ささらがた錦の紐を解き放けて数は寝ずに唯一夜のみ

皇后の妹・衣通郎姫を入内させるが、皇后の不興をかい、茅渟宮へ住まわせ、天皇は遊獵にかこつけ郎姫のもとへ行幸を続けたが、皇后にとがめられた。

「歴代天皇御製歌」(六)

『雄略天皇』第二十一代 在位四五六一年―四七九年

雄略天皇、允恭天皇の第五皇子。朝鮮半島における日本の立場が転換の時期、日本府の兵が新羅を助け、高麗を破つたといろ。

国内では、諸国に桑を植えることを奨励、養蚕事業をすすめられた。

丹波から豊受大神宮を伊勢に遷し、伊勢外宮の起りとなった。

万葉集巻頭は、雄略天皇の歌からはじめられている。

籠もよ み籠^こ持ち 掘^{ふく}串もよ み掘^{ふく}串持ち この岳^{をか}に 菜摘^をます兒 家聞^をかな 名告^の
 らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居^をれ しきなべて われこそ
 座^ませ われこそは 告^のらめ 家をも名をも
 (万葉集、巻第一の巻頭第一首)

菜を入れる籠をもち、菜を掘るヘラをもち、菜を摘んでいる娘さん、お家を聞かせてください。名前を教えてください。

大和の国を治めている私に、私から名のりましょう、家も名前も。

子規の短歌革新とアララギの歌人（7）

佐藤 喜仙

（二）新聞「日本」入社まで

国文科に転じたものの、子規は大学にあまり期待していなかった様である。漱石によると「正岡といふ男は一向学校へ出なかつた男だ。それからノートを借りて写すやうな手数をする男でも無かつた」（漱石談『正岡子規』）と回顧している。その結果、二十四年の年末試験は何とか切り抜けたが、翌二十五年の年末試験には落第した。

それではその間子規は何をしていたのか。常盤会で友人と語らつて「詩歌俳は勿論都々逸でも何でも構はんからウナロじゃないか」の目的のもと「紅葉会」を結成したり、寄宿舎監督であつた内藤鳴雪や他の仲間と連句を巻いたりと、文学活動に熱心であつた。特に注目すべきは、こ

のころからライフワークとなつた「俳句分類」に取りかつたという事である。「毎日大学の図書館へ往てそれを写して来ては内で清書する」という事をしていたのである。連歌の発句の分類から初め、貞門、談林と進んだのであるがこの頃は「義務のやうに思ふていやくやくして居た。（中略）猿蓑を分類する時の愉快は今に覚えて居る。其句を写す間は始終胸が躍つていて何やら嬉しくてたまらなので、猿蓑一部の分類は極めて短い時間で済んでしもふた。此時が始めて俳句の趣味を自分に感じた時である」（俳諧三佳書序）この時をもつて子規の俳句開眼とされている。

時は明治二十四年の末のことである。この事がきっかけかどうか判然としないが、子規は常盤会の寄宿舎を出て、陸羯南の紹介で本郷駒込追分町の下宿に移っている。そこで子規は独立の為の手段として、俳句はお金にならないので小説家を目指した。

贈呈誌

滋賀アララギ 終刊号

奥本 静子

佐和山を守りし家臣の屋敷跡をこめてすすきの原のおほへり

秋田アララギ 一月号

森田 溥

冬雷 十二月号

小宮 守

吹く風に綾なす池面ひとすぢの視界のなかのいまの静寂

秋楡 十二月号

大野 かね子

群山 十二月号

瀬戸 忠頼

しづけさがこの後の吾の身上ぞ大過なくすぎし長き一世の

支倉常長持ち帰りたるバラの絵を収めし寺に行かむ日のいつ

愛媛アララギ 新年号

西村 栄子

榎の木 十二月号

塚本 明夫

紅薄く萎るる昨日の花に添ひ今日咲く玉すだれの花の真白し

山間のコンビニ二店を見めぐりぬ種あり苗あり衣類も並ぶ

鹿児島アララギ 十二月号

郡山 禮子

定年俳句誌 十二月号

すつぽんの首伸ばしけり

松本周二

保育園の運動会にかけ抜ける孫の大和は一番を行く

一湾の島浮き上がる稲光

古川 千鶴

高知アララギ 十二月号

林 敏子

穂の原 十二月号

荒川 榮子

メダカ飼ふバケツに今朝の花ひとつ布袋葵のむらさき寂し

ピンポンをせし昔を想い出しラケットにぎり球追いかける

ある自然科学者の手記 (9) 大橋望彦

天才と凡才 (2)

更に話は飛躍してしまいが、中国の詩にこの様なものがある

学者如牛毛 成者如麟角 (北史・文苑傳)

即ち、学者〓凡人、牛毛〓普通、成者〓聖者、麟〓麒麟の麟(麒〓雄、麟〓雌)、麟角〓雌の麒麟に生えている角、即ち、極めて珍しいこと。これは、凡人は普通に見られるが、聖人は滅多にいない。という事であるが、ここで面白いのは、学者〓凡人のことで、人は皆学ぶ者であることである。それに比して、成者〓聖者(天才と解しても良い)となることは、雌の麒麟の角を探すように、滅多にお目に掛かれる物ではないと云っていることである。これは、生まれながらの人間は、皆同じように教育されながら一人前に育っていくものであるが、最初から天才のように一人前の人間なんかは在りもしない。在ったとしても、まるで雌の麒麟に生えている角を探すぐらいに大変なことである。とも、解され、天才の出現は突然変異ぐらいの頻度であるので、否定に近い言い

方である。生物学的には極めて単純明解と言えよう。この学者が凡人なることに愉快さを感じる。

唯一つ、この天才的なヒトの出現について別の考え方もあることを紹介しておこう。これはあくまで疾病の例ではあるが、遺伝子の病として極めて明確に知られている Hutchinson-Gilford 症候群という疾病がある。プロジェリア、日本語で早老症といわれる疾病である。最も典型的な症状は、若くして老化現象が進行し、平均寿命が13歳程度しか存命しないことである。即ち、一般で云う寿命のカレンダータイムが極端に短縮されている。まだ不明の点が多いことながら、遺伝子と寿命の関連性を考える意味では極めて重要な疾病といえる。前述したように、ヒトは出生のときから脳の構造は出来上がっており、皆均等に機能の馴化と教育が成されているのが一般であるが、この疾病ではそうならないのである。別名として、矮人病或いは福助病ともいわれ、異常に大きな頭、突出した眼球、怒張した頭部血管等の外見的所見のほかに、アテローム性動脈硬化症、性的発達不全、アルツハイマー症候群の併発等では確かに若年性の老化現象が見られるが、それに対して年齢から比較してその知能指数が極めて高いことも知られている。先の機能の馴化と教育の程度が通常

以上の速さで進行していることになる。一体これはどういうことなのかは判らない。唯云える事は、天才のメカニズムに関係しているのかもしれない。病気なので、凡人と比較することが適当かどうかは問題外としてだが。

天才と凡人をこのような考え方をしていくと、段々結論が遠くなっていきそうなので、此の辺で終わりにしたほうがよさそうな気がしてきた。筆者は、今、凡人でいることの楽しさを楽しみ感じている。

扱、天才と言っても体力的な天才ということがあ
る。身体的な発育には、個性の差が大きく違うこと
が屢々見られる。

持つて生まれた身体つき、とは遺伝的要素を示すこ
とは明らかであつても、訓練によつて変えることも
可能である。だからオリジナリティは成立する。どん
な人種（遺伝子）の違いがあつても競うことが出来
ることを前提にしている。究極の限界に挑戦するこ
とは、何も天才を産もうとしているのではない。そ
れでも抜きん出る人（金メダリスト）は居るもので
ある。それを天才というか？果たして鱗角の人か？
そうだとすると、オリジナリティはつまらなくなる。

話を戻すが、個人々々の感性とか能力とかのそれ
ぞれの相違は普通に存在する。その相違を極大にし
たらば天才が生じるのではないか？確かに理論的に
はそうなるのかもしれない。然し、その極大の状態
は最初から在ることが稀有に等しいことで、それも
あつたとしても「金剛石も磨かざれば、単なる石と変
わらない。」事となる。即ち、天才と言う金剛石は滅
多に無いし、あつたとしてもやはり多少の努力なり、
環境が整わなければ顕れないものである。

やはり天才は、凡人から抜きん出る人が産み出さ
れていると思うのがよさそうである。

追記 現時点での結論は以下の如く纏められる。

凡人は全て学習に始まる。

学習は模倣に始まり、創造にいたる。

創造は個性（オリジナリティ）を産む。

個性は人間を形成し、天才を産むに通じる（のかな）。

《天才は、優れたオリジナリティを持つ凡人》

◎訂正

2012年8月号

37ページ下段3行目、DN

Aか一をDNAか二に。

2012年10月号

36ページ

4行目、リング状
の一をリング状の二に。

絹の話 (27)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹の非繊維利用最先端

先述して来た様に絹をパウダやゲルにして、化粧品や食品に添加して保湿性、抗菌性、防紫外線性、食味感向上日持ち効果を期待した多くの商品が作られている事は既にお伝えして来ました。

昨今では絹のオブラートやスポンジ、人工血管等医療部門の各種製品作りの実用化向けの研究開発が急速に進んで来ました。その基は昆虫が作る絹蛋白が人の身体に親和性が非常に高いからです。またPH7の領域では伸縮作用が繰り返されても疲労度が少なく、耐久性に富んでいます。その様な事から人工血管作りが最も注目されて、(独) 農業生物資源研究所や各大学、医療関係企業、繊維メーカーなので成果を競っています。どれだけ細く、しなやかで、血栓が出来ない管を作ることが試されています。従来のポリエステル等の人工血管は伸縮性に乏しく血栓ができる恐れがあるため、直径6ミリ程度が限度でした。それを福井の繊維メーカーと東京農工大の共同研

究が絹のニットに絹をコーティングした直径1ミリのしなやかな血栓の起こりにくい人工血管作りに成功しました。さらに優れた物が次々に登場して来る可能性が出て来ました。絹は下着に着ていても人の老廃物をなかなか付着させない作用が功を奏したのか、菌の繁殖抑制効果は何らかの逆作用する事はないのかなど、ラットの実験は良好であつても人の命は長いので、まだまだ臨床実験を長期に渡つて繰り返さなければなりません、期待する所大です。

絹のスポンジは意外と簡単に出来ます。高野豆腐の様です。膝の軟骨の代替えに利用出来る可能性が高まつて来ました。膝の軟骨では多くの研究成果が実用化されていますが、いずれも親和性に難点が有り、人体が受け入れるのに何年もリハビリが必要であつたり、チタンの様に丈夫とは言え、たゆまず使われる消耗のため数年に1度は交換しなければならぬ問題があります。

ラットの実験ですが、絹の高野豆腐軟骨は沢山の孔の中に軟骨が再生されて来るようです。親和性のせいでしょうか！そうであれば大変な朗報です。

絹のオブラートは絹の食品化が成功した二十数年前、

既に作られていました。私はこの時医療用絹オブラートと包帯の実用化を計るべく、あちこち奔走しましたが、話に乗って下さる所は見つかりませんでした。

ただ1件大手の都市銀行が話は面白いので融資ではなく投資しましょうかと云う事になり、何日も掛かって企画書を持参した所、数日経って「会社の規模が小さすぎるし、特許も無い会社には投資出来ない」と云う返事が来ました。その様な時代背景や、綿のガーゼや包帯で良いではないかと云う絹の機能的な理解されていない需給関係でオブラート生産は長い間ストップしていました。ところが今はベンチャー企業含めて活性化しています。

蚕の蛋白質生産工場

蚕は卵から五齢の熟蚕になるまでに僅か60余日で1万倍に成長し、人にとって大変有効な蛋白質をつくります。蚕は地球上で最も早く、大量に蛋白質を作る生物です。しかも牛などに比べて狭いスペースで、飼料効率も遥かに高いのです。なにも蚕が繭になるのを待たなくて大丈夫です。5齢の透き通った蚕は体中が蛋白質でパンパン

になっています。これを絞ればよいのです。

このゲルを使って今後はオブラートにも血管や皮膚、骨、歯にもなる時代が来るでしょう。勿論化粧品や健康食品の添加剤に使われるのは論を待ちません。

そうなって来ますと蚕を飼育するのは農家や世界の貧農地帯ではありません。大企業が経営する光と温度、湿度等が管理された都市近郊の工場で桑葉などは与えず、人工飼料で飼育されます。そうなると年間休みなく飼育され、収穫できますので、人力には比べ物にならない経済効率になります。日本の養蚕システムは明治以来養って来た世界に冠たるノウハウがあります。

養蚕世界一に復権する日も夢ではありません。

ところが、蜘蛛は7種類の糸をお尻から出しますが、その中に絹より遥に細くて強靱で10倍も伸縮性に富んだ糸があります。遺伝子組替えでその蜘蛛の糸を蚕が作る研究の成功がまじかです。人工血管作りは蜘蛛の糸に修練されるかも知れません。

昆虫の機能性利用は急速な進歩を続けています。

物理学者と詩歌の世界 (37)

一石

エドウィン・ハッブル

エドウィン・パウエル・ハッブル (Edwin Powell Hubble, 1889-1953) は米国の天文学者。現代の宇宙論の基礎を築いた天文学者の一人である。

ハッブルはミズーリ州の生まれ。シカゴ大学に入学し、数学と天文学を学び、物理学者のR・ミリカン (1923年のノーベル物理学賞受賞) などの影響を受けた。その後、英国・オックスフォード大学の最初のローズ奨学生に選ばれて法学を学び、修士号を取得した。第一次世界大戦中、兵役に服務したが、戦後シカゴ大学のヤーキス天文台で天文学の研究に戻り、1917年に博士号を取得。1919年にカリフォルニア州パサデナ近郊にあるウイソン山天文台に就職し、それ以来一生をこの天文台で過ごした (参考資料1)。

ハッブルの天文学における主な業績として以下のものが挙げられる (参考資料2)。

1) 1923-1924年、ハッブルは当時世界最大の望遠鏡を用いて数多くの「星雲」を観測。ほんやりした「星雲」の中に、我々の銀河系外にある銀河そのものが含まれていることを発見した。また、このような系外銀河をその組成や形態により分類する方

法を提唱した。

2) 1929年、ハッブルは、銀河の中にある変光星 (セファイド変光星という) を観測し、明るさと変光周期の関係を使得って、銀河の赤方偏移 (注1) と距離の間に成り立つ「ハッブルの法則」 (銀河が遠ざかる速さはその距離に正比例する) を発見した。この法則から宇宙は膨張することが結論された (注2)。

ハッブルの発見に先立つ1917年、A・アインシュタインは、新たに構築した一般相対性理論によると「宇宙は収縮してしまふ」ことに気づいた。しかし、当時の宇宙観に従い「静的宇宙」を確信していたアインシュタインは自らが導き出したこの方程式の帰結が信じられず、やや人為的に「宇宙項」を導入してこの「困難」を回避しようとした (注3)。しかし、その後ロシアの数学者A・フリードマンは宇宙項を取り入れないアインシュタイン方程式の厳密解を発見し、「宇宙は時間とともに膨張または収縮変化する」とする宇宙モデルを提唱した (1922)。ハッブルの法則は、このフリードマンの「膨張宇宙モデル」を実証したものとと言える。この発見は後にビッグバン理論につながることになり、従来の宇宙観に「革命」をもたらした。

ハッブルの名を冠したものに小惑星ハッブル、月のハッブルクレイター、ハッブル宇宙望遠鏡がある。また邦訳された著書に『銀河の世界』 (岩波書店)、『宇宙論の展開』 (東京図書) などがある。

ハッブルに関わるエピソードをいくつか紹介する。

1) ハッブルは後半生、天文学を物理学の領域の一つと見なされるように主張した活動を行なった。それは天文学者たちによる天体物理学の分野での貢献をノーベル賞委員会に認知してもらったためでもあった。最終的にはノーベル賞委員会は、天文学を物理学の範疇に含めるべきであると決定したが、それはハッブルが亡くなった1953年であった。ハッブルは同年のノーベル賞受賞の通知を受ける直前に死去。妻はハッブルの死後、受賞者に内定していたことを知らされた。

2) 若い頃は学問的な才能よりもスポーツの才能で知られていた。高校大会では7種目の競技で1位であった。また走り高跳びでイリノイ州の州記録も作っている。大学でもヘビーウエイト級のボクサーとして有名で、世界チャンピオンのジャック・ジョンソンと戦ったかどうかというプロモーターの声がかかった。オックスフォード時代にも大学対抗のトラックス競技に出場したり、フランスのボクシングのチャンピオンと試合をしたりした。帰国後もインディアナ州でバスケットボールのコーチをした。

3) ハッブルは心不全のためカリフォルニア州サンマリノで没した(1953)。妻のグレースは「葬儀をせず、墓標のない墓に埋葬するように」という夫の遺言に従った。現在もハッブルの墓の所在は不明という。

注1: 赤方偏移とは天体が観測者から遠ざかるスピードが速いほど(ドップラー効果により)そこからの光の波長が長く(つまり赤い方向に)伸びる現象を言う。

注2: 式で表すと、「(銀河が遠ざかる速さ) \parallel (ハッブル定数) \times (銀河の距離)」。このハッブル定数の逆数から「宇宙の年齢」が推定できる。ハッブルの観測では、当時の観測上の曖昧さにより、ハッブル定数として、今日知られている値の約7倍の値が得られていた。近年、極めて高い精度による観測値から宇宙の年齢は約137億年と推定されている。

注3: アインシュタインは、ハッブルの発見を聞いた後、この方程式の修正を「生涯最大の過ち」だったとして撤回した。しかし、近年、宇宙の加速膨張が発見され、その原因とされる謎の「ダークエネルギー」は方程式上ではこの「宇宙項」に相当すると考えられている。

参考資料

- 1) フリー百科事典『ウィキペディア』エドウィン・ハッブル『[Wikipedia, the free encyclopedia](https://ja.wikipedia.org/wiki/Edwin_Hubble), E. Hubble」
例えば、マークス・チャウン『宇宙誕生ー原初の光を探して』(筑摩選書)を参照されたい。

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

八 山口茂吉 2

岩見のくに行きつつ君は旅ぐせの下痢に一夜をなや
み給ひし 昭和十年 同

旅にいでて下痢をすること癖のごとくなりつつやう
やく君老いたまふ

右は、茂吉の鳥根への人麿研究の調査旅行に随ったときの作である。一首目には茂吉が一晚中下痢に苦しんだことを詠んでいる。茂吉は日記に、「夜十二時半二腹痛下痢ス」と傍線を付けて記している。日記によると、茂吉はこの旅の復路小田原でも下痢を催している。作者はこういう「癖のごとく」になった下痢も老化の兆候であることを思つて感慨を深くしているのである。

鉛筆の研屑を君は火にくべてさながら香のごとしと
言はず 昭和十一年『赤土』

九十二歳のわが祖母の写真を君見たまふ涙ぐましく
その側に居り

何でもないようなことだが、作者にとつては心に残

ることだったのだろう。とくに二首目は、この時代に九十二歳というのは珍しいほどの高齢だったと思われるから、それに感動した茂吉が側にいる作者に何かしみじみとしたことを言つて「涙ぐましく」させたのであろうことが思われる。

上着ぬぎ手に持ちながら普門院をいで来て君のあと
に従ふ 昭和十二年 同

東京の亀戸にある伊藤左千夫の墓参に従ったときの歌である。左千夫の命日は七月三十日であるから、この歌は七、八月ごろの暑い日に作られたものだろう。初句もそれを語っている。

ただならぬ動きのなかに年明けて六十一歳に君なり
給ふ 昭和十七年『海日』

冬の夜におもおもとして楽の音の響き来るを君も聴
かむか

錫蘭セイロンに虹の立てるをかなしみし四十三歳の君と六十
一歳の君と

君が心和ぐ日きびしき日がありて従ひ学ぶ十七年の
あひだ

アララギの選歌終りてよろこべる君をしみじみ吾は
仰ぎぬ

一連は茂吉の還暦にかかわる。一首目の「ただならぬ動きのなかに年明けて」は、前年十二月八日に大東亜戦争が起きたことをいう。二首目はその戦争開戦一周年記念日あたりのことを内容にしていようか。三首目は、大正十三年、ドイツ留学からの帰路の船上で、

スコールの降れるところと豎の虹現るところと近き
が悲し

『遍歴』

いつしかも海のかなたに遠そきしセイロンに虹の立
てるあはれさ

わが船のそぎへ遥げきセイロンにかなしき虹は立ち
てゐにけり

と詠んだときの茂吉は四十三歳の若さだったが、いま還暦を迎えているというのである。四首目は、自分が初めて茂吉に会ったのが十七年前の「茂吉帰朝歓迎歌会」の席上であったこと、師事してから、勞られたり怒鳴りつけられたりといった大小の感情の起伏をみてきたことをいうのである。五首目は茂吉が選歌の任を終えたことをいうのではなく、渾身の力をふりしぼるかのような月々の選歌の後の「よろこべる君」への感慨を、自らの安堵を含めていうのである。

君と共にアララギの為事励みたり佐阿徳の鰻日ごと
に食ひて
昭和二十一年『高清水』

茂吉の鰻好きを知らぬ人はない。一人で、あるいは門弟と行くところがたいへいは鰻屋なのである。茂吉のある日の日記に、「山口君ノトコロニ行キアララギ選歌ヲナシ、夜食鰻」とある。行く店は銀座の竹葉だったり渋谷の佐阿徳だったりすることが多い。ただし、茂吉が日記に「夕食に粥と蒲焼(佐阿徳の六十銭)とを食つて心満足である。六十銭のを食つたのは近來珍らしいのである」と書くほどだから、よく食したのは少し安価なものだったろう。また、「日ごとに食ひて」は思い出の美化であろう。

ゆるもなく心おそれて君が家焼けたる跡に吾は立ち
をり
みちのくの出羽のくにに居り給ふ君をおもへば吾は
苦し系
昭和二十一年 同

茂吉の自宅・青山脳病院が全焼したのは昭和二十年五月二十五日の東京空襲によってであった。二十一年には茂吉は山形・大石田に疎開している。山形の辺境にさびしく暮らしている茂吉を、青山の焼け跡に立って偲んでいるのである。

楽しい時間 3

山本紀久雄

2012年12月30日

今回は辻料理教室とNYでの料理体験、二つの「楽しい時間」をお伝えしたい。

昨年12月の辻料理教室はXmasバージョンで、「骨付きチキンのガーリック焼き」が登場した。他の二品は「鮭のテリーヌ」「チーズいろいろ」。チキンのレシピーは以下である。

①鶏肉は皮にフォークで穴をあけ、にんにくのすりおろしと塩、こしょうをすりこむ。

②じゃがいもは皮つきのまま、ラップをして4〜5分電子レンジで加熱する。

③オーブン皿に網をのせ、①と②を並べ、180℃で200℃で30分位焼く。

④③の鶏肉と、切り込みを入れバターを落としたじゃがいもを小房にし、ゆでたブロッコリー、ミニトマト、レモンを盛り付ける。

加えて、ワインはボジョレー、それもジョルジョ・デュブツプであり、なかなか美味しい。盛況な辻教室の今日は、入口で細かく畳んだ紙を選ぶよう指示される。和田さんの提案で、グループ分けをくじ引きで決めるためだが、参加者の殆どとは親しいので、どこのグループでも構わない。

くじ引きで決まったのは第四グループ。勿論、若い人ばかり。自分が一番年上だから、常に他の人は若いということになる。自慢ではないが、話題がいろいろ盛り上がる。聞いていると、どうも今日は今年最後の辻教室なので、二次会兼忘年会に行くらしい。若い人は元氣だ

なあと思いつつ、当方の頭には家で待っている可愛いビーグル犬が浮かんでくる。家内が外出なので、犬の散歩を命じられている。残念ながら蕨駅に向かつて一直線である。

ところで、日本のXmasでは骨付きチキンを食べ、アメリカではサンクスギビングデー（感謝祭）に七面鳥を食べるが、この二つには因果関係がある。

まずは、どうして日本人がXmasにチキンを食べるようになったのか。以前から疑問に思っていたので、改めてサイトで調べてみた。

Xmasにチキン、という図式は日本での話。ヨーロッパのXmasでは普段は食べないような豪華な食事を出すのが、もともとの風習。その豪華さは、ひとつは量と大きさ、ひとつは高価さ。そこで、日常食べない高価で貴重な肉として、ガチョウ、アヒル、鴨、クジャクなどがよく食べられていた。

そこへ、アメリカから七面鳥が持ち込まれて、その珍しさや大きさが豪華と言うことで、特にイギリスでは七面鳥の丸ごとがXmas料理の定番になり、それが逆輸入の形で現代のアメリカのXmasでも定番となり、さらにはアメリカの影響を受けた日本にも伝わったが、日本では七面鳥は手に入りにくい。

それで、一番簡単に入手しやすいニワトリとなったが、『丸ごと』という日本ではなじみにくいので、鶏肉の腿部分がXmas料理となったわけ。これに成程と思う。

だが、今のアメリカでは11月第4木曜日のサンクスギビングデー（感謝祭）に七面鳥を食べることが多い。その理由は以下である。

「11月の第4木曜日は、サンクスギビングデー（感謝祭）。1620年にイギリスで宗教弾圧を受けた清教徒達達が、新天地を求めてたどり着いたアメリカで、ネイティ

ブインディアン達から厳しい大陸で生き延びるすべを学び、感謝の気持ちを込めて、秋の収穫のお祝いでネイティブアメリカンを招待して、共に喜んだというのが、始まり。しかし、その後長い間、感謝祭は忘れ去られていたが、南北戦争後の混乱と対立を押しやるため1863年、当時の16代リンカーン大統領が、国の祭日とし家族の集いを奨励し、遠く離れた家族が再会し絆を深めるアメリカ伝統のとして根付かせ、今では、アメリカ人にとつて、とても大切なアメリカ独自のお祝いの日となっている。

料理は「ローストターキー」(スタッフイング stuffing した七面鳥)とグレイビーソース。スイートポテトキヤセロール、コーンブレディング、パンプキンパイがテーブルに並ぶ。

つまり、アメリカからイギリスに七面鳥が入っていき、次にアメリカへ逆輸入され、アメリカから日本には鶏肉に変わってXmas定番料理となった、というのが経緯である。したがって、この七面鳥スタッフイング料理は日本では体験できない。一度体験したいと以前から思っていたところ、NYマディソン・スクエア・ガーデンのあるペンシルベニア駅近くの、古いビルの三階に住む友人夫婦のところで、サンクスギビングデーなので一緒に調理しないかと連絡があった。早速に訪問し、奥さん、友人のポルトガル女性と当方で、牡蠣入りスタッフイングに取り掛かった。

まず、牡蠣をよく洗い半分に取り、15ポンド(6.8kg)の大きい七面鳥の内臓を取り出す。内臓は煮だして出しに、内臓を取った後は水でよく洗う。フライパンで玉ねぎ、セロリ、なすをバターを多めに炒める。炒めた後に、パンをトーストし、細かく切って混ぜ合わせ、これに牡蠣を入れ、卵を溶かしてかき混ぜる。この際のパンはコーンミールを使う。これからまだ続くが、全部



書きだすと指定字数からはみ出すので省略。レシピー希望の方はご連絡を。いずれにしても七面鳥を、オーブンで華氏350度(177)に4時間半入れる。一般の際には1ポンドの重さに対し15分程度と言われている。その際、七面鳥の羽の部分の下の部分にスライスする。そうしないと羽の部分が焼き過ぎるので。スリーブは克蘭ベリーソースで、これにオレングジの皮をスライスして入れ、ジンジャー・生姜を擦り入れる。野菜サラダを別につくっておく。今日はキャベツ、赤ピーマン、いんげんなど。マッシュポテトをつくっておく。さて、七面鳥は薄切りにし、野菜とソースをかけて食べる。最後はデザート、アップルパイで。飲み物は白赤ワイン。七面鳥を切り取りサーブスするのは主人の仕事。

さて、パーティーは楽しい時間だ。高校生長女の同級生3人も加わって8名が大きなテーブルを囲む。どの国でも若者の話題はたわいもない。しゃっくりはどのようにして出で、止まらないときはどうするか・・・自分も参加して料理をつくり、その後の食べながらの話題はいつも楽しい時間だ。それは日本とアメリカと他の国、世界共通だと思ふ。以上。

日光紀行

夏目勝弘

子規の「日光の紅葉」に「春の花は見るが野暮なり、秋の紅葉は見ぬが野暮なり」の諺を作った言わけで思い付き、病床の鳴雪翁に話す。翁は病床より飛び起き「我も行かんと勇み給ふ」と、思い立つ日を吉日と汽車で宇都宮へ、そして一泊した。

○木枕に惟然泣く夜の長さかな (子規)
その日は朝よりの大雨、明日を思い、木枕で長い夜を過したであろう。

子規庵の前で思い付き、旅立ったのは同じ宇都宮から十一月十七日の午前五時。

日光の駅前では紅葉も終りに近いとはいえ、まだ写真に十分取めるに値いする。しかし男体山に初雪があり谷筋に白じると雪が見える。

○日光は枕にする木も紅葉かな (子規)

子規は一本の杖を求めカゴヤに教えられた近道を上つてゆくも翁の足に追いつかず、坂の上では、翁が木の根に腰かけ句作している。

○かごかきの熱い息ふく紅葉かな (子規)

○秋の山籠を残して紅葉かな (子規)

○雲間より瀧の落ちくる紅葉かな (鳴雪)

中禅寺湖へ行くバスは、全員席に掛けなくてはならないため、団体などは一名が乗れなければ全員が次のバスとなる。よくしたものでワゴン車で客を集めている業者がいる。自分は一人名で、その車に乗ることにした。停車場に止らず近道を行くため三十分以上早く竜頭の滝に着いた。

左千夫と節が、滝見の旅に出たのは「日本」の明治三十三年九月八日第五回募集短歌(竹の里人選)「課題瀧」締切七月三十一日一人三十首以下による。

左千夫の「瀧見の旅」の紀行文によると、「七月十五日は根岸庵の會の日なり。十七日にいでた、んと長塚節と約す。」と雨が降っても二十一日には行くと決め支度をととのえる。「二十一日朝まだき起き出でて見るに有明月東の空に残りて雨はなごりなく晴れたり。」と裏見の滝に着いた左千夫と節、茶屋には誰も居ないが、外国人の若い女性らが居り靴の上からワラジを付けていたとある。

自分は裏見の滝には行かなかったが、今日の日光市内、華嚴の瀧の周辺では多くの外国の人々、特に団体らしき集団が目についた。

左千夫らは翌日朝早く案内人を雇い瀧壺に下りて行った。左千夫と節の瀧の歌を比べてみる。

竜頭の瀧

○つがの木のしみたつ岩をいめぐりて

(左千夫)

○うちわたす二つの瀧の下つせの

(節)

華嚴の瀧

○とことばに雨の横ふる瀧つぼの

(左千夫)

○奇しき葉廣の草とりかへる

○二荒のふもとをゆけば野きはみ

(節)

山あひにして瀧かゝるみゆ

子規の教えを左千夫は一言とも違えてはならないと節への手紙で書いている。両者の歌に対する考え方が、最後まで相容れられなかった。子規そして左千夫と節との交ごもの事を思いながら、いろは坂のカーブに身体をキシマセながらの帰りのバス、少し行くくとバスが進まない、運転手が無線で渋滞を知らせている。曜日等に気にしなくなった自分に気付く、今日は三連休の日曜日であったと。

「氷魚」のことから (145) 岡本八千代

先回到「当世媛鏡」のあらすじを了えて、少しばかり、私
なりの感じとつたものを書いてみたい。

「当世媛鏡」は、春にはじまって、春に終っている。――
「これは日本の小説（1910年以前）の定型ともいわれて
いる。（即ち円環構造）で、ヤマ場は何回も費やして、手紙
だけで一回をなす場面。また、あつと思う間に五年が経つた
りする。」（近代文学研究者、名古屋大学教授、助川徳是先生
の論文、『子規の小説―その覚え書き』より。）とある。

「媛鏡」の主人公、お清は操を通し、愛する人（才吉）を
も他の人にあげてしまう、健気な優しい美しい女性として描
かれてゐる。そして、最後は尼僧になつてしまい、消えてし
まつたのだ。

女性の生き方として、現代では考えられないような気がす
る。いや、現代でも中にはそういうお清のような女性もいる
かもしれないが――。私も考えさせられないでもない。

子規がそういう女性をテーマに書いていったことは、男で
ある子規自身の運命と重ねられているのではないか。とさえ
思った。

今年は、早々と雪が降ったりして寒い冬となつた。庭に、
月見草の花がうす黄色に丈低く一花、二花と咲いている。月

見草は、夏の花なのに……。これから、子規の小説、「月見草」
のことを書いてゆく。

「月見草」は未定稿になつていて、次の小説、「花枕」と同
時作といわれている。しかし、子規の弟子、高浜虚子宛の手
紙に、「小説は須磨を書きかけ候処、とても間にあわず中途
でやめて「花枕」という極短篇（原稿二十枚）を一日にも
し候、なかなかの勇氣に有之候」とあつて、「月見草」の執
筆は明治30年2月とすべきだろう。――と子規全集の解題で
のべられている。そして、両方とも**のぼる**の署名がある由。

子規は、日清戦争の時、自ら希望して、金州（遼東半島）
へ従軍記者として趣いたのであつたが、すでに病を患つてい
たため、帰国することになつた。その船旅の途中の遼東海に
大咯血となり、神戸病院に入院したのであつた。死ぬか生き
るかの容態であつた。

しかし、そこで（神戸病院）、九死に一生を得て、（約二ヶ
月入院していた）今度は、直ぐ近くの須磨保養院に転院して、
（七月23日）養生をする生活となつた。その時、書いた小説
が「月見草」である。

子規が保養院にいる時に、他によく見舞つたのが、竹村黄
塔であつた。彼は河東碧梧桐の兄である。当時、神戸の師範
学校の教官として二十五年以来神戸にいたのだつた。

かくして、子規は、この須磨は朝夕散歩する舞台ともなり、
須磨の景色の中で、少しづつ身体の具合もよくなり、友人ら
にも長い手紙なども書き綴つたりした。以可次回へ。

ことのはスケッチ (410) 今泉 由利

『マイロ・M-I-H-I-R-O』

ニューヨークの二〇一二年になるカウントダウンの大騒動のなかで、「さつきニューヨークに着いたばかり」という「マイロ」と出逢った。

パンパン・ドンドン・ピカピカ・ハッピーのなかでも、まわりを把握し、率先して場を楽しくしていたマイロ。その騒動の片隅にいた、身も心も深く傷ついているシリアの犬だから、やさしくしようとして、ひどく吼えられ噛み付かれたかな、腰を抜かしたマイロ。もっとお酒を、もっとお酒：いっぱい飲んだなあ。そして、ひと皿のスパゲッティを分け合ったりしたのだった。

私の子供達の仕事のひとつに、アメリカでの作詞、作曲、楽曲を日本の歌手に提供する。その曲を歌いこなすトレーニングをする。

マイロは、そのボイストレーニングに日本からニューヨークへやってきたのだった。

次の日、年が明けたお正月の朝、トレーニング開始。「ボイストレーニングってどんな風にするの」私、見学を申し出た。約束のスタジオに行き、大きなビルが、沢山の一つ一つ完成したトレーニング・ルームになっていて、その一つの部屋で先生とマイロを待っていた。

日本で歌手をしていると、時間を守らないことは当然だったのでしょう。生徒は、三十分も遅れた。早速はじまったレッスンは、

遅れてきた息切れのまま、下を向いてお酒飲みすぎの勢のない歌声だった。

先生は、まず彼の背筋を正し、胸郭を広げることを指示され、透き通る声になるには、乳製品は痰が発生しやすいから食べない。酒類、コーヒ、紅茶、タバコ、刺激物の禁止、全身を使つての呼吸法のトレーニング。：「これらのことが守られるのであれば、遅刻をしないのであれば、教えます。守れないのならトレーニングに来なくても良い。」と申されました。

「守ります」とマイロ。

そして先生は、自の身体でもって示されながら教授をされた。懇切に、丁寧に、異民族の出逢つたばかりの、マイロの良さが引き出せるように。：。その日の授業の最後に、一番はじめに歌った同じ歌を、マイロは別人のように素晴らしい変化をみせた。この日、この教えが、このことがあったことが、どんなに歌手のマイロにプラスしたことか。しっかりと見とどけた。

あれから一年が過ぎた。「うまくいつている！」という噂は聞こえてきていた。

『恵比寿・ザ・ガーデンホール』での『マイロ・M-I-H-I-R-O』のコンサートの招待状が届いた。

会場付近は大変な人だつた。ホールは満席。ずっとマイロを追いかけ、マイロと一体化しているファン達へのマイロのクリンな力強い歌声は、天井が無かつたら天まで響き渡つたことだろう。

マイロの一年間の、先生の教えをしつかり守つたことを偲んだ。コンサート後、舞台裏で彼に会つた。素晴らしいコンサートを褒めたかつたし、精一杯のその上のゆとりへと、進化し続けるマイロを見守つてゆくことを。

和菓子街道 (76)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

逢坂峠から少し下ると、旧東海道の左手に走井餅屋跡を示す小さな石碑が見つかる。

寛政9年(1797)刊の『東海道名所図会』は、「後の山水ここに走り下って沸き出づること瀝々として寒暑に増減なく甘味なり」と走井の名水について触れているが、近くの月心寺には、今もこんこんと清水が湧き出る井筒が残っている。この名水を用いて、明和年間(1764～72)に走井市郎右衛門が初めて作ったとされるのが「走井餅」だ。

昔の絵図に描かれた走井餅はどうやら丸い餅だったようだが、現代版は細面だ。三條小鍛冶が走井の名水で名刀を鍛えたことにちなんで、刀のようにほっそりと長い形にしたものとも言われる。

残念ながら現代版ではもう走井の名水は使っていないようだが、



月心寺の井筒を満たす水は清冽で、さぞ甘いことだろう。

求肥で餡を包んで、ほっそりと整えた現代版の走井餅

◆走り井餅本家

住所：滋賀県大津市横木一丁目3-3

電話：077-528-2121

お知らせ

▽三月号の原稿は、二月一日(金)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

寒中お見舞申し上げます。この二月号が皆様のお手許に届くのは二月下旬となりますが、まだまだ寒い日が続いていることでしょうか。

編集後記を書いている今は十二月末日です。このひと月のズレは度々、ご挨拶の言葉を選ぶのに考えさせられています。昔から出版の世界では十二月の末に新年号が出ることは当り前のことです。実は我々は新年号でも二月号でも、「明けましておめでとうございませう。」と挨拶できなかつたわけです。こんなどうでも良いことを考へてしまった平成二十四年の大晦日でした。

(平松)

△郵便事情などにより、お手紙などが予定通りに着かないことがあるようです。歌稿は三、四日の余裕をみて投函して下さいとありがたいと思います。

(小野)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年一月二十五日印刷 第六十巻 第二号
平成二十五年二月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目勝弘

発行人

平松 裕子・山口千恵子

発行所

今泉由利

三河アララギ会

豊川市 御津町 御馬 西三七

T E L (〇五三三)七五二〇〇九

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

URL Homepage <http://maizumityuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美